



続・増穂薪窯通信

てんやわんや

文・写真 増穂登り窯 大田治孝

7月になっても雪が残る富士山（7月10日撮影）

第9回 依柱彫技法

20年前、池田満寿夫の『般若心経』シリーズの大佛塔・佛塔（陶遊142号参照）制作の準備には、シャモットが大量に入った陶土20kgをタタラ棒で約5cm以上の厚さに延ばし、合紙を入れて重ね、1週間乾燥させて制作を始めました。それでも2段目の高さになると、20kgのタタラは変形してしまい、作者の計算どおりにはいきません。考えた挙げ句、佛塔の中に骨を入れることにしました。動かすと崩れてしまう可能性があるからです。

作品の中に残っても問題のない材質でなくてはなりません。そこで、中細の竹の節を抜いて、ヒゴ



志村恵子さんの作品を指導中の李基柱氏。

として何本も作品を支えるために差し込みました。この方法でなんと1m以上の佛塔は完成1ヶ月以上乾燥後、焼成しました。もしも、この時「依柱彫技法」を知っていたら、異なる結果となっていたかもしれません。

「依柱彫技法」とは、韓国釜山市の慶星大学校名誉教授、李基柱氏が考案した新造形法です。李氏は井戸茶碗研究の第一人者であり、陶彫、絵画などを学生に指導していました。そのなかで、陶によるオブジェ作品を短時間にテッサン（マケット）通りに制作する方法をこの造形法で可能にしました。それが「依柱彫技法」です。



志村恵子さんの完成作品。

現在、増穂登り窯で制作されている陶オブジェ作品は、そのほとんどが、この技法を基本として制作しています。

この技法の良い点は、3〜5日間の制作時間ですので、作品の上部と下部の乾燥度合いがあまり違わず、焼成時にクラックが入りにくいということです。

縦・横60〜80cmの作品制作ならば、1日目に1〜2cmのタタラを作り、乾燥させます。2日目、計画通りのサイズにタタラを組み込みます。その後、陶土をピンポン玉サイズに丸め、小判形に平たくします。これを二重折りにしてタタラに接着させ、指で挟みます。これをひたすら続けていくと、テッサン通りの形になります。全体のバランスを見ながら、四方八方から陶土の接着が可能ですので、作者の意図通りに制作できます。また、短時間での制作ですので、途中で造形の変更も可能です。上段の制作中に下段の削りもできます。全体から制作可能ですので、ゆったりとした気分で安心して自由な造形を作り上げられます。

池田氏の作品制作時は、下段部は計画通りの基礎となりましたが、2段目になると、2日目に傾いてしまったり崩れてしまった

倉田正巳さんの制作1日目。



制作2日目。



山下邦久さんの制作中の作品。



制作3日目。



制作4日目。



り、面白い造形作品ほど失敗作となつてしましました。そのため、制作当日に作品の中に新聞紙を入れて火を点け、無理矢理乾燥させたこともありました。それでも池田氏の気に入った作品ほど崩れてしまったのを思い出しました。歴史に「もしも」はないといいますが、もし、この技法を使用していれば、池田氏の

陶作品の中には、もつと傑作があったかもしれない。それを考えると残念です。タタラで組み上げるだけではなく、このタタラをパイプ型にして組み上げると、人物像の制作に適しています。組み上げ次第では、かなりの高さ（約1m）まで可能となります。ただ「依柱彫技法」にも欠点があります。5日以上の日程で制作しますと、基礎となる最初に組み込んだタタラが固まつてしまい、取り出せなくなりますが、作品の重量が重くなるとともに、焼成した時には割れる原因ともなつてしまいます。基本造形は、5日以内に制作を終了。その後、2週間から3週間乾燥させれば完成



山下邦久さんの完成作品。上は龍（幅30×高さ57cm）。右は狛犬（幅30×高さ57cm）。



です。この間に作者の意図でディテールを完成させてください。増穂登り窯では、年に1〜2回、この「依柱彫技法」のワークショップを開催しています。

◎展覧会情報

日韓交流・陶展
慶星大学校芸術学部大学生と増穂登り窯の仲間たち
会期：2014年8月20日〜26日
会場：道の駅 富士川2階
（富士川大橋富士川町側）
主催：増穂登り窯
協力：慶星大学校芸術学部 韓国釜山市・山梨県富士川町